相模経済新聞　2022年9月10日号

宇宙生命哲学 ことはじめ

49

北里環境科学センター
名誉顧問／宇宙生命哲学者
川藤　俊洋

原発回帰政策の愚かさ

日曜日の夕刻、NHKの長寿番組「ダーウインが来た！」の映像に、多くの視聴者の心が惹きつけられる。地球上のほとんどの生物は、自分たちの子孫を残すために、あらん限りの知恵と工夫を凝らし、命がけの戦いを繰り広げる。人間の本能をも上回る優しい母性愛、父性愛の発露に、茶の間の視聴者は素朴に感動する。人知もかくあるべしと素直に思う。そして、多くの生物は、何万年、何百万年、何億年という年月をかけて様々な進化を遂げる。

我々人類（ホモ・サピエンス）は、およそ25万年前に、アフリカ東海岸で誕生し、生活を豊かにするために様々な技術を開発し、およそ1万年前に情報を記録に残す技術、すなわち文字を発明した。この技術により、人類は瞬く間に膨大な知識と情報を蓄積し、豊かな文明社会を構築した。そして、目の前に広がる豊かな環境を手当たり次第に食いつくし、未来の環境に回復不能な負の遺産を残す極悪の生活サイクルに迷い込んでしまった。経済効率最優先で、富の収奪に明け暮れる社会の先に、豊かな環境の保護は期待できない。

原発の稼働・新設状況（2022年8月現在）

原発回帰は、正に今を豊かに生きることだけに注力した、「あとは野となれ、山となれ」という、夢も希望もない白暴自棄の政策であるといえよう。原発依存社会は、野も山も残らず、正に地球を廃墟に導く社会である。原発の問題は、国レベルで解決できる課題ではない。地球全体の環境を如何に健全に保つかという地球規模の問題である。

日本は、歴史上唯一の核兵器による被爆国であると同時に、福島第一原子力発電所で歴史上最悪の事故を起こした国である。汚染水の処理、炉心溶融デブリの処理にしても、根本的にはほとんど解決の見通しさえ付いていない。フクイチの事故は、国家の存亡にも関わる深刻な事故と再認識すべきである。

ロシアのウクライナへの侵攻で、核兵器の使用も取りざたされ、地球は、第三次世界大戦の勃発の危機に瀕している。日本は、戦後、原爆被爆の試練にも耐え、平和憲法のもとに先人達の努力により、世界に先駆けて平和国家を作ることができた。今こそ、福一事故の反省の元に、平和国家の旗手として、世界に号令をかける絶好の機会ではないかと考える。岸田文雄総理には、世界に向かって、核兵器廃絶への具体的な行動を起こし、脱原発社会の構築に舵を切って頂きたい。